

『市内初の鉄道駅における図書返却サービスの実現』@青葉区

～局と区の連携事業によってできたこと～

1 青葉区における図書サービスのニーズ

平成16年度に実施した「青葉区民意識調査」で「日常生活で不足・不便と思うこと」で第1位となった項目、それは「図書館」であった。青葉区の地域図書館である山内図書館の平成16年度の年間の個人の貸出冊数は約91万冊と中央図書館を除く地域図書館17館の中では第2位と図書へのニーズは高い。区民が感じる「不便さ」は、立地によるところが大きいと思われる。青葉区の地区図書館である山内図書館は、区の東部の区界に近い所にある。平成6年の分区当時から図書館増設の要望があるが、現在のところ、具体的な計画はない。

2 プロジェクト発足と区役所の参画

区役所は、区要望や地域ニーズ反映システムといった予算要求の制度を用いて、区民からの要望を教育委員会事務局へ毎年のように提出した。平成16年6月、教育委員会事務局は、図書サービス拡充を検討するため、プロジェクトを発足させた。そして、毎年の要望活動が認められ、青葉区もそのプロジェクトに参画することとなった。

プロジェクトは、市民利用施設など、市民にとって身近な所で貸出・返却ができる方法を、今までの検討の範囲より一歩踏み込んで検討することから開始した。いくつかの手法や場所を検討した中で、青葉区は、これまで横浜市が採用しなかった、駅における図書返却サービス事業の展開を提案した。市民の利便性が高く、かつ大きなシステム再構築が不要な比較的低コストでできる方法だからだ。しかし、現場からは、タイムラグや個人情報は大丈夫か、350万冊に上る蔵書を円滑に流通させることができるかなど、不安を訴える声もあった。

それでも、プロジェクトで蓄積した議論の数々を考慮し、当分は区役所が問い合わせ窓口となり責任も持つということで、まずはモデル事業としてやってみよう、という結論を得ることができた。

3 駅での図書返却サービス事業スタート

駅に設置する図書返却ポストについて、鉄道事業者からは、より安全性の高いものであることが条件とされた。昨今のテロなどへの対策の意味もある。そこで、全国でも初の図書館カードを認識して入口のロックを解除するシステムをポストに搭載することにした。

駅に図書返却ポストを設置した日、駅を行き交う人々に図書返却サービ



写真 図書返却ポスト
「ポストは、区民に愛着をもっていただけ
よう、夢のある楽しいデザインとしました。」

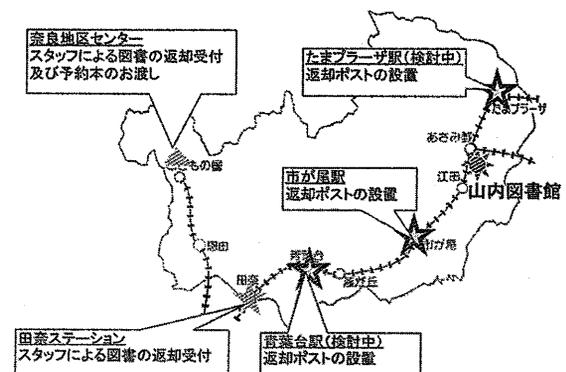
スの開始を知らせるちらしを手渡すと、「あら、本は重いから便利になるわ。」「都筑図書館の本でも返せるのか？便利だね。」といった声を頂いた。このとき、このモデル事業が、実際に区民に喜ばれるサービスとなることを実感できたのだ。

そして、平成17年5月16日、横浜市内初となる鉄道駅における図書返却サービスは、田園都市線市が尾駅でスタートした。

4 利用状況と今後の展開

平成17年9月現在、利用は好調であり、最近2か月の1日あたりの平均返却冊数は90冊を超えている。現在は、モデル事業の拡大に向けて準備中である。図書館以外の返却サービスポイントを3か所増やし、全部で5か所とする計画である。このことによって、物理的な便利さだけでなく、区民が図書を身近に感じることに繋がることを期待している。

図 青葉区における図書サービスのモデル事業展開実施計画



5 改めて区と局との連携とは

区と局との連携とは、地域の悩みを共有化し、互いの特性を活かして共に解決をはかることであると考えている。

区は区民からのニーズを受けながら自ら事業化できる範囲の限界に対するジレンマを、局は全市的なバランスとのジレンマを抱えている。しかし、局が抱える問題を区が持つ地域の視点を加えることによって、今回のモデル事業は実現化できたと考える。さらに、区局連携という手法は、それぞれが持つ問題を1つの事業で同時に解決でき、予算を効率的に運用する意味でも効果的に活用できるであろう。

文末になるが、この事業は、局との連携はもちろん、鉄道駅関連事業者や施設関係者などの御理解と御協力あってこそ実現できたものである。この場を借りて感謝申し上げます。

<菅井亜紀子=青葉区区政推進課企画調整係>